



弦楽器イルカ



目次

カゲロウの幻

表紙	2
はじめは、よくあるニュースだと思った。	3
何を言われるかわからなかったし、	4
通された部屋は	5
白く明るい部屋の中に	7
それから実際に電話がかかってきたのは	9
「事務方からあなたのことを聞いて	12
どんなつもりで僕はあの人を	13
病院からの帰り道を、	14
「楽しかったね。じゃ	18
その後はもう、僕も必死だった。	20
その後しばらく、ヨシザワさんと	23
アヤカちゃんに会えたのは、その翌日が最後だった。	26
手紙を読んでもみると	28

あとがき

あとがきと、若干の意図補（蛇）足	34
------------------	----

奥付

奥付	36
----	----

カゲロウの幻

表紙



はじめは、よくあるニュースだと思った。



はじめは、よくあるニュースだと思った。

『本日未明、自営業を営む A さんとその妻が、県内の山中でガードレールを乗り越え、30 mほどある崖下へ転落。全身を強く打ち死亡しているのを、地元の住民が発見した。現場は狭い山道となっており、付近に A さんのものと見られる自家用車が駐車されていた。また、A さんは県内で書店を数店舗経営していたが、経営がうまくいかないことを周囲へ漏らしている経緯もあり、警察は心中と事件の両面から捜査中』

これと同じようなニュースを、何度目にしてきたことだろう。自分とは関係のない A さん。だがもちろん、それが同じように繰り返されているからといって、事件の悲劇性がなんら薄まるわけではない。当事者にとっても、それを見聞きした者にとっても、絶望的な結末であるという苦い後味だけが残るニュースだ。

ただ、ごくありふれているがために、人々はそれらをととても簡単に忘れ去ってしまう。大学の、人気のない学生食堂で遅い昼食を食べながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

季節は秋だった。脇に誰かが置いていった新聞があり、読むともなしに眺めていて、ふと目にとまっただけの記事。使い古されたテーブルの上には、ライスとハンバーグと味噌汁、付け合わせは甘く煮た人参とコーン、学生食堂で最もポピュラーなメニュー。読んだ端から忘れ去られ、食べた端から消えていく。

そして、過ぎてしまえば二度と思い出すことのない、ありふれた日。

だが、ふと目を上げてテレビのワイドショーを観た時、そのニュースが突然、時間と場所を越えて眼前に迫ってきた。

スタジオでは、リポーターが A さんの実名と顔写真を紹介していた。その妙に青白い肌に見覚えがあった。

あれは.....

『タチバナさん夫妻には 6 歳のお子さんが一人いて、難病を患い都内の病院に入院中』

数秒の間、画面に映された病院は、何度か前を通ったことのある隣町の大きな総合病院だった。

しばらく動くことができなかった。

気づくとテレビではもうすでに通販の CM が始まっていて、股関節の筋肉を鍛えるこ

とがどれほどダイエットに貢献するか、司会者が懸命にこちら側へ訴えかけていた。

何を言われるかわからなかったし、



何を言われるかわからなかったし、おかしい男と思われても仕方ないだろう。デリカシーのない野次馬と勘違いされる恐れもある。だが、行きたかった。あの出来事を伝えたい、何より自分だけに留めたくなかった。打ち明けたい、そう思った。

午後の授業で単位に必要なものはなかった。だが、例えあったとしても多分こうしていただろう。僕は、あのテレビを観てから昼食もそこそこに大学を出ると、その足ですぐさま隣の病院へ向かった。自転車で約30分。道中、焦る気持ちを抑え、極力ゆっくりと、頭を整理しながら自転車を漕いだ。どういう対応をされるかわからないが、行くからには冷静に、わかりやすく話したかった。時間軸を整理しながら、あの時、何が起こったのか、何を言われたのか、そして、自分がどうしてこんなことをしているのか、もう一度振り返って、今に至る過程を導く言葉を探した。

病院の入り口が、先ほどテレビで観た光景と一緒だったため、自分が映像に入り込んだようなちょっとした違和感を感じた。あれは生中継だったと思われるが、すでにマスクもいないようだ。

自動ドアをくぐり、初めて中へ入った。清潔さはもちろん、洗練された内装かつ、「綺麗」というカテゴリーを決して踏み越えないシンプルなデザインだ。1階ロビーは2階まで吹き抜けになっており開放感を感じるが、それは単に「現代的で清潔な病院づくり」というマニュアル通りの設計に思われた。

どこへ行くべきなのだろう。患者も職員も、特に変わった雰囲気は何もない。台風の直撃予報があっさりはずれたような、拍子抜けするほど日常的な風景だった。

自転車で若干弾んだ呼吸を落ち着かせながら、とりあえず相談窓口へ向かった。一人、カウンターの前におばあさんがおり、何事か、聞き取りづらい会話を続けていた。若干困り顔の女性二人が対応していたので、その後ろで少し離れて立ち、しばらくかかりそうだと考え、もう一度、頭を整理しようとした。

すると、おばあさんから遠いほうの女性が後ろの自分に気付き、声をかけてきた。「どうぞ」

自然な対応に動悸がドクンと反応する。自転車のせいではない。おばあさんの脇を抜け、受付の前へ進む。20代前半、僕と同年くらいの、やはり清潔感のある女性だった。

一言が出ない。

「あの、いや、忙しいところすみません。どう言っていいかわからないんですが」

沈黙。

おばあさんはこちらをちらりと見て、「ありがとうございます」と一礼して退散した。

「先程、あの、ニュースを観まして、えと、ご両親が亡くなられて、お子さんが一人、遺されたという、それでこちらの病院がテレビに映っておりまして、入院して治療を受けていると。僕は、関係者というわけではないのですが、父親に当たる方とお会いしたことがありますして、それで、そのことでぜひ、どなたか、お子さんに関係のある方へ、お伝えしたいことがあります」

何度も頭の中で反芻した言葉だった。緊張の割に、それほど違和感なく伝えられたはずだ。

「それは、どのような御用件でしょう？」

おばあさんの相手をしていた40代前後の女性も、明らかに怪訝そうな表情でこちらを見ている。

「それが、もしよろしければ、どなたか、そういった相談のできる方と、別室でお話したいのですが。人の目があると、話しづらい部分が若干ありまして」

受付の女性二人が顔を見合せた。一瞬の躊躇の後、はじめに対応した20代前半の女性が「しばらくお待ちください」と言って、奥のデスクに座っている男性のところへ行き、声をかけた。男性は僕を見て、女性と二言三言話し、席を立て僕の方へ向かってきた。40代後半、眼鏡をかけた真面目そうな印象だった。

「どうも。失礼ですが、ご遺族の関係者の方でしょうか？」

「いえ、お伝えしたいことがあって、関係者かどうかと言われると、ただ」

できれば、この場ではあまり詳細を話したくなかった。ちょうど後ろから若い夫婦が子供を一人抱いて来て、受付のもう一人の女性に呼びかけるところだった。

「少しお話させて頂きたい、お伝えしたいことがありますして」

「身分証をみせて頂いてもよろしいですか？.....失礼ですが、学生の方でしょうか？」

「はい。あ、学生証あります」

肩にかけた小型のバッグから財布を取り出し、学生証を渡した。男性はその裏表を軽く確かめた。特に疑っている様子はなかった。

「わかりました。それでは、お話だけ伺いましょう」

通された部屋は



通された部屋は「地域医療連携室」と書かれた部屋だった。「部屋の名前は気にしないでください。ここが空いていただけなので」と先回りするように言われた。はじめに受付を担当した女性がお茶を持ってきて、そのまま男性の隣席についた。男性はワタナベと名乗った。

「サイトウさん、でしたね。それで、どのようなお話でしょうか？」

「はい。実はその、先ほども少しお話したとおり、僕は以前に一度だけ、今回あの、自殺、されたというお父さんにあたる方と、お話というか出会っております。それが、ふた月くらい前なのですが、深夜、歩道橋の上から飛び降りようとしている方がいまして、それがその方だったんです」

あれは、夏の始まるの季節だった。深夜、ある文学賞へ作品を応募するために郵便局に行った帰りだった。ギリギリまで推敲した後、当日消印をもらいに郵便局へ向かい、疲労と充実感の入り混じる妙な高揚感を抱えながら帰路についていた。ビールでも買おうかと近所のコンビニへ寄るため歩道橋の階段を上り、最上段の手前で、誰かが歩道橋の手すりを乗り越えようとしているのが見えた。

正直、幽霊かと思った。ビクッと驚いてしばし呆然と見ていた。慣れない動きで手すりを越えようとする懸命さが、薄暗い電灯の下で樹液を争う甲虫のようになぜか妙にコミカルで生々しく、それが今、眼前で本当に起こっていると気づき、慌てて駆け寄った。どうしようという前に体が勝手に動き、自分でも驚くほど力強く、その人の体を手すりから引き剥がした。

その人はやや小柄な男性だった。白い長袖のYシャツにジーパンという格好で、靴は脱いでいなかった。組みついた時に煙草と酒の匂いがした。汗ばんだ背中感触が生身の温かさで手のひらに残った。

引き戻した勢いで男は歩道橋の床で腰を打ったらしく、しばらく痛みによるうめき声をあげていた。僕は立ったままそれを見下ろす格好になり、なぜか申し訳ない気持ちになったのを覚えている。大丈夫かと声をかけたかったが、男は決してこちらを見ようとはせず、じっと下を向いたまま左手で腰をさすり、時折右手の拳をぶんぶんと振り回し、何事かぶつぶつと呟いていた。察するに、「チクショウ」とか「余計なことをして」とかの、ネガティブな口調であることは間違いなかった。途中で居たたまれなくなったが、しかし、そのまま立ち去ることもできなかった。誰も通らなかったし、見てもいなかったせいで、お互いに居心地の悪さを感じたまま、僕はその間の長さに「ドラマとは違うな」という変な感覚を覚えたほどだ。

「ホント、くそ、勝手に、いいよ」

やはり、酔っているようだった。恥や悔しさもあるのだろう。待望の第一声だったが、全く言葉になっていなかった。

「あの、大丈夫ですか？」

「……何が。いいよもう、関係ないから」

こういう場合、交番へ連れて行ったほうがいいのかのだろうか。しかし男は僕に背を向けたまま、のそのそと立ち上がろうとしていた。手を貸せる雰囲気ではなかった。そのま

ま、僕とは反対の方へ歩いて行こうとした。かける言葉がなかった。それでも、死ななくてよかったと思った。眼前で死なれたら、やはり嫌な気持ちになるだろう、と徐々に冷静さを取り戻しつつある頭で考えていた。

そのとき、男が振り返った。血走った眼で、決して痩せているというわけではなかったが、血色の悪い青白い肌が電灯に照らされて浮かびあがった。初めて顔を正面から見た時になぜか、髭がきれいに剃られている、という部分が印象に残った。

「救ったなんて思うな」

「え？」

「思い上がるな。俺は救われてない。むしろ逆だ。俺の代わりにあんたが家族の面倒見てくれるのか？ 金を、あんた……」

男はじっと僕の眼を見据えた。迫力があつた。とっさに「すみません」と言いそうになったが、ためらい、黙っていた。男も次の言葉を嘔み殺したようだった。

「……チッ、俺がどれだけの覚悟で飛び降りようとしたか、苦しんで、悩んで。俺は家族のために必死でやったんだ。俺のためじゃない、家族のためにやったんだ。誰にも非難される覚えはない。むしろ感謝されることだ、これで救われたはずだ。それを、あんたがやったのは救いなんかじゃない。証明してやる」

「証明って……」

「見てろ、忘れるな。忘れるなよ。絶対に。証明してやる」

そう言って、男は立ち去って行った。

白く明るい部屋の中に



白く明るい部屋の中に沈黙が訪れた。暗い雰囲気避けようとして視線は行き場をなくし、普段は気にならない浮かんでいる塵にばかり目がいった。まるで沈黙を形にして部屋を満たしているようだった。

話している間に思い出したことや、あるいは時間が前後していることもあった。だが概ね整理して話せたと思った。そして話し出すと、そこまで複雑な出来事じゃないということにも気づいた。正直、自分が背負っていると感じていたものが案外軽いのではないかと感じて、逆にホッとしたほどだ。

「つまり、それで、あなたは……」

男性は言葉に詰まった。たぶん、言葉を選んでいるのだろう。

「いえ、すみません。自分でもうまく言えないんです。本当は、大した出来事じゃないのかもって今、話してて気づきました。ニュースを見た時は、絶対に誰かに伝えなきゃって思ったのですが、でも、こういう出来事があってだけで、それが」

「いやいや、話して頂いてありがとうございます。お気持ちはわかる気がします」

「.....辛いですね」

女性のほうが初めて口を開いた。今まで気付かなかったが、単に清潔というよりむしろ少し日焼けした、活発な印象の女性だった。髪の毛がくるんとはねているせいかもしれない。

「一つお伺いしたいのですが、その話は、もうどなたかにされたのですか？ つまり、たとえばマスコミとか」

「いえそれは、これが初めてです。誰にも、友達とか身内とか、そういった人にも話したことがなくて。どう言ってもいいかわからなくて。正直、自分でも整理できなくて」

そう、怖かったのだ。うまく言えない感情だったが、話してみて気づいた。自分が少なくとも善意のつもりでしたことが、相手に恨まれるような結果になり、それを誰かに話したら証拠が残ってしまうようで、そこから出来事が大きくなってしまふ不吉な予言のような気がしたのだ。誰にも広げないことで、何事もなく過ぎ去ってほしかった。だが、決して忘れることもできなかった。

「そうですか。それはよかったです。よかったというか、つまりその件ではいろいろと問題がありまして。いや、問題というか、まあ当然というかデリケートな部分ですね、それでできれば、その話を他ではなさらないで頂きたいです」

「もちろん、そうだと思います」

「あと、もう一点お伺いしたいのですが、この話をされて、それで何か、ご要望というか、こちらに望まれることがあるのでしょうか？」

「いえ、望むとかではなくて、すみません、自分でもそのところをどう言ってもいいのかわからないのです。言いにくいのですが、その.....」

言葉が見つからず言い淀んだ。だが、言いたいことは思いのほか明確だった。

「...つまり、責任を感じています。自分があの時したことは、決していいことにはならなくて。だってあの時はあの男性一人でしたが、今度は夫婦二人で、その、心中の可能性もある、と言われて、それなら、あのとき止めないほうがよかったのではないかと。それに、あのときあの人に言われたことを、誰か関係の方に伝えるべきなのか、それとも自分がこのまましゃべらずにいるべきなのか、それもわからなくて。ただ、お子さんが病院に入院しているということを聞いて、それで、話すべきじゃないかと思ったのです。なんというか、どのような責任になるのかわかりませんが、少なくとも亡くなった人の言葉というか、したことを、どなたかに伝えるべきかと。でもよく考えたら、先に警察へ行くべきだったのかもしれない」

「...そうですね、確かに。捜査に影響するようなことですしね」

女性が頷きながら言った。男性がそれを受けて言った。

「わかりました。とりあえず、こちらで受けさせて頂きます。しばらく待ってもらえますか？ そうですね、警察へもこちらから連絡します。その、今状況が非常にデリケートですので。それで、はっきりとしたことは言えないのですが、この件に関しましては、こ

ちらで一度引き受けまして、後日、改めてこちらからご連絡するという形でよろしいでしょうか？」

「はい。相談というか、面倒をかけるようになってしまって、すみません」

「いや、そんなことは本当はないですよ。あ、連絡先と、学生証をもう一度、あの、コピーさせてもらってもいいでしょうか？」

「もちろん、構いません」

「じゃ、ヨシザワさん、お願いします」

「はい」

ヨシザワさんと言われた女性が学生証を受け取り、コピー機があると思われる奥の部屋へ行き、機械音が聞こえた。そして、戻ってきた女性が学生証を返す時、僕の眼を見ながら力強く言った。

「大丈夫です。あなたは正しいことをしました。決して、間違っていないです」

「...え？」

男性も頷きながら言った。

「そうですよ。その通りです」

「.....いや、ありがとうございます」

本当にそうなのだろうか。僕は、御礼の言葉を返すことしかできなかった。虚空へ放り投げたボールと変わらない、誰にも届かない感謝のように感じた。

それから実際に電話がかかってきたのは



それから実際に電話がかかってきたのは、三日後のことだった。その日はバイトもない土曜日で、10時すぎに起き、冷蔵庫にあるもので適当にご飯をすまそうと思っていた。一人暮らしもだいぶ慣れたもので、たまにあまりにも美味すぎる料理を作ってしまう、寂しくなる時さえある。だが、今日は完全に手抜きで、目玉焼きと昨日のご飯をチンしてすまそうと考えていた。携帯が鳴ったのはちょうど卵をフライパンで蒸している時で、そろそろ仕上げのクレイジーソルトでもかけようと蓋を開け湯気で眼鏡を曇らせている最中、着信音に気づき慌てて火を止め、リビングのテーブルに置いてある携帯を取った。ディスプレイには見慣れない数字が並んでいた。

かけてきたのは、この前対応した男性ではなく、小児外科の医師だった。「突然お電話して申し訳ない」と前置きしてから、「ぜひお話をお伺いしたいので、再度、来院してく

れないだろうか」との申し出があった。「話の内容によっては、こちらからお願いしたいことがある」と。

「お願い、ですか？」

「電話では言いにくいので、来て頂いたときにお話しします」

非常に落ち着いた、親しみやすい声だった。

今日の都合を聞かれ、今日は特に何も予定がないことを伝えると、もしよければ午後1時に小児科の外来に来てほしい、と言われた。こちらもそれで異存はなかった。

病院まで自転車をこぎながら、電話での会話を思い出していた。大した関係者でもない自分がお願いされることは何もないはずだ。だが、悪い気もしなかった。大学3年の秋に就職活動を始める者も多かったが、自分はどうもその気になれず時間が空いていた。だから用事があるというだけで少し気分が良かったし、何より自分が受け入れられた、という手ごたえが喜ばしかった。この三日間、連絡が来ないどころか、もしかしたら変質者として処理されたのではないか、と考えていたからだ。

それにあれ以来、この事件が一切報道されなくなったことも気がかりだった。ネットにも取り上げられていなかった。世間はこんな片隅のニュースなど簡単に忘れ去ってしまい、自分までその波に呑み込まれたように感じた。

1時より少し早かったが、時間を潰す場所もなく、とりあえず言われた通り小児科の外来へ行ってみることにした。相変わらず清潔な白い建物の中であって、少し意外なことに、小児科の区画だけは完全に別個の暖色系の色で塗られていた。デザインも、たぶん子供を意識したのだと気づく、曲線的で多少入り組んだ造りになっていた。

「外来の受付に名前を言ってほしい」と言われていたので、自分の名前を受付の女性に伝えた。この前、相談窓口にいた女性と同じ制服だった。そういえば、彼女はまだ相談窓口にいるのだろうか？ ふと思って後ろを振り返ったが、ここからは壁があって病院の中央にある受付カウンターを見ることはできなかった。

すぐに、「サイトウさん」と聞いたことがある声で呼びかけられた。向き直ると、白衣を着た白髪の男性がすぐ脇に立っていた。

「先ほど電話をかけました、小児外科のミツイと申します」

「あ、サイトウです。先ほどは、どうも」

それでは、と案内されて診察室に入った。最近病院へ来ることはなかったが、ベッドと椅子と机、そして総合病院にありそうな最先端っぽい機械が何台か置かれていた。小児科らしく、アンパンマンの折り紙や小さなぬいぐるみもいくつか置いてあった。

「お忙しいところ、お呼び立てしてすみません」

年の頃は40代後半だろうか。いかにも小児科という感じの柔和な顔立ちの先生だった。いくぶん髭の濃さが目を引いたが、髭にもだいぶ白い毛が混じっていた。

「いえ。学生なので、特に忙しいとかはないので、構いません」

「そうですか、そう言われると助かります。ところで、事務課のワタナベより伺いました。私はアヤカちゃん、あの先日亡くなったタチバナさんの娘さんですが、彼女の主治医をしています。あなたもその節は、いろいろあったようですね。故人を悪く言う気はありませんが、とても残念なことでした」

「タチバナ」という苗字を聞いて先日のニュースを思い出した。忘れていたが、あの人は

そんな名前だったのを思い出した。

「その、ここであなたがタチバナさんと出会ったことについて、これ以上何う気はありません。今日お越し頂いたのは、実は少し違う話です」

「はい」

「失礼ですが、あなたの学生証も拝見しました。文学部に通われているんですよね？ あなたを信用できると見越してお話ししますので、これからの話は、是非とも他言無用でお願いしたいのですが」

「...わかりました」

流れるように話が進むので、頭の中でシナリオができていくんだろうな、と感じた。

「まず、あなたのことについて話させてください。というのも実は、私はあなたを知っているのです。もちろん、現実に出会っているわけではなく、具体的に言うと、タチバナさんからもらった最期の電話で、あなたのことを聞きました。

タチバナさんは、ご夫婦とも非常に真面目な方で、毎日病院へお見舞いに来ていました。ただ、たぶん疲れていたんでしょうね。会社というか、経営がうまくいっていないということも、噂で知っていました。それに真面目だからこそかもしれませんが、プライドが高い面もあったようで、看護師と話しても『大丈夫』としか言わなかったそうです。顔色もあまり良くないので、知り合いの心療内科を勧めたのですが、拒まれました。力不足だったと悔やんでいます。

実は最期の電話というのが、本当に事件の直前にかかってきた電話でした。深夜、私は当直だったのですが、タチバナさんには私の携帯の番号を教えていましたので、病院ではなく直接かかってきました。この病院にはアヤカちゃんのような難病の子が何人か入院していますが、私は原則、そういった子たちの親には、いつでもお互い連絡できるように自分の携帯の番号を教えます。それだけで信頼を得られるケースも多いのです。

電話の声を聞いて、すぐお酒を飲んでいるな、と感じました。酒乱の気がある人なのかもしれません。『とにかく、娘をお願いします』と言われました。『金のことは今弁護士に頼んだから』と。上ずった、非常に切迫した口調でしたので、異常な事態というのはわかりました。『落ち着いてください』と言いましたが、こちらの声はほとんど届いていないようでした。

『先生には一つお願いがある。これから起こることを、娘には絶対に教えないでくれ。妻も隣で寝ている。睡眠薬を飲んだから終わるまで起きない。妻も疲れたと言って、こうなることを望んだ。だが、ヤケになってるわけじゃない。悩んで選び取った結果だ。人間いつか死ぬ。絶対に終わる時が来る。だから、どんな死に方をするかだけだ。娘もいつかわかってくれる。娘のために、私たちは死ぬ』

そう言われて、『今どこにいるのか、早まったことはするな』と強い口調で言いました。

『アヤカちゃんはきっと治るから、両親が死んだら悲しむぞ』と。

『大丈夫。とにかく、娘を助けてくれ。命が助かれれば、その後は問題ないよう弁護士に頼んだから』と繰り返されました。電話を切られそうな雰囲気でした。

『ダメだ、なんで死ぬんだ。電話を切らないで、死なないでくれ』と頼みました。その後しばらく、沈黙がありました。何か、言葉を選んでいるようでした。

『死なないことが救いじゃないよ、先生。ただ生きてるだけでは、誰も救われない。先生

なんて世間知らずだからな』そこで、あなたの話が出たのです。

『前に一度、飛び降りを止められた、若い男に。学生か、やっぱり現実を知らない風だった。だがそれじゃダメだ。こんなに俺も妻も悩んだのに、あんたらは簡単に敗者と決めつけるな。俺は敗者じゃない。見下すなよ。むしろ勝つんだ。娘が助かりさえすれば、後は死んだら勝ちだ。わかってないよ先生、報われない苦勞をするために娘が助かって、何の意味がある？ ここで死んで、証明してやる。敗者はお前らだ。先生は娘を助ければいい。後は俺がなんとかする』

そこで、電話を切られました。あとはニュースで見た通りです。弁護士から翌日電話があり、あくまで故人の遺志を尊重してほしい、と言われました」

「事務方からあなたのことを聞いて



「事務方からあなたのことを聞いて、話が繋がりました。それで、会うことにしたのです。あなたにとっては寝耳に水かもしれませんが、あなたが学生ということで時間があるなら、アヤカちゃんのために協力してほしいのです」

「協力……」

「実は、手術を三日後に控えています。非常に大切な時期です。ご両親の事件も、もちろん故人の遺志もあります。それよりも手術に影響を与えないように、アヤカちゃん本人には伝えていません。また、病院と弁護士が協議の結果、報道にも働きかけ、少なくとも手術が終わるまでは一切の報道を自粛する取り決めもしました。マスコミとしては、この手術が成功しても失敗しても、美談として書き立てるようなので、それで納得したのでしょうか。ですから一つ目の協力とは、先ほども言ったように口外無用、ということです。意味はわかりますよね？」

「はい」

「それともう一つ、こちらのほうがとても重要なお願いなのですが、今日から三日間だけ、アヤカちゃんのご両親との伝達係役を演じてもらいたいのです」

「え？」

「今アヤカちゃんには、両親は風邪をひいてお見舞いに来られない、と言ってあります。その嘘を本当にするために、両親からの伝言をこつこつとやってきた書店の従業員を名乗ってほしいのです。なぜ自分が、と思うかもしれませんが。理由は今から説明します。結論として、あなたしかいない、と私は思っています。」

まず一番大きな理由ですが、正直に言いますと、こういう事件のせいかわりになるはずの親戚が誰も関係を持ちたがらないのです。代わりにできる限り看護師が入れ替わり一人にさせないようにしていますが、それにも限度があり、何よりアヤカちゃんが『家に帰りたい』と泣き続けています。それに病気とはいえある程度歩くことができるので、目を離れた際に部屋を抜け出されたら一大事です。

そしてもう一つ、実は弁護士がその伝言係を買って出るという申し出がありました。ですが、できれば私は他の方をお願いしたいと考えています。理由はいくつかありますが、大きくは自殺に対する考え方の相違です。私は、医師という立場もあると思いますが、決して自殺を受け入れません。自分の命を奪う殺人として、断固として反対します。しかし、あの弁護士は『そういった死に方も理解できる』と言いました。それを聞いて、はじめは大変腹が立ちました。ただ、弁護士がその後の話し合いで、『実は自分は故人の幼馴染で、最期に友人として全力でサポートする』と打ち明けました。そこに、彼なりの葛藤があるのかもしれない。

ただそれでも、私は自殺を容認しません。特に、未来に希望を持って手術を受けるアヤカちゃんのサポートを、両親の犠牲を肯定する人間にさせたくないのです。誰に甘いと言われても、他人を犠牲にした幸せでなく、共に苦労を分かち合う幸せを信じる人間でなければ、彼女の心はサポートできないと考えています。

現状、三日後の手術を遅らせる考えはありません。手術を成功させるために、あなたの力を借りたいのです」

どんなつもりで僕はあの人を



どんなつもりで僕はあの人を助けたのだろう。力強い説得を聴きながら、自分のあやふやな行動の源を恥ずかしくさえ思った。確固たる信念じゃない。ただ、体が勝手に動いただけだ。しかし、それがこれほど多くの人の生に関わってくるとは、全く予期していなかった。確かに、あの方は証明したのだ。僕の行為を否定するために死んだ。そう感じた。

「説明が長くなってしまい、申し訳ありません。突然のお話で気が重くなってしまったかもしれませんが、お願いするにあたって、全てを話すべきであると私が判断しました」

「……そう、ですか」

「すみません、あまり時間がないもので、これから午後の回診へ行かないといけないの

で。これが私の携帯番号です。本日夕方頃、改めてご連絡します。それでもし引き受けてもらえるのであれば、明日から三日間、お昼の時間にアヤカちゃんの面会に来てください」

そう言って、医師から病院の名刺を渡された。手書きで、病院の電話番号の隣に携帯の番号が書いてあった。

「何か、質問などありますか？ なんでも聞いてほしいのですが」

聞きたいことがありすぎて整理できず、感情のままに言葉が口をついて出た。

「先生が言いたいことは、ある程度わかったように思います。ただ、あの、お話を聞いて、正直自分がとんでもなく大それたことをしたのではないかと感じています。それに、自分が他の人を差し置いてそんな大役をしてもいいのでしょうか？」

「確かに、そういった不安をお持ちになる気持ちはよくわかります。ですが、こんな願いをしておいてなんですが、できれば難しく考えないでください。少し乱暴な言い方をすれば、あなた以外に適役がいないのです。もちろん、責任は私が取ります」

そこで、医師は大きく息を吸った。唾をゴクリと呑む音のはっきりと聞こえた。

「でも、サイトウさん。悔しくないですか？」

「え？」

「このまま引き下がったら、本当に負けた気がしませんか？ 勝たなくてもいい。ただ、自分が信じてきた正しさを否定されたまま終われますか？ あなたが先日わざわざ病院まで話をしに来たのは、私と同じ混乱を抱えているからだと感じました。負の感情に振り回されて自分が揺らいでいるんです。だから、逆に証明しませんか？ 正しさは無数にあるはずです。それなら、誰も犠牲にしない正しさを私は信じたい。そう思いませんか？」

病院からの帰り道を、



病院からの帰り道を、あまりはっきりと覚えていない。気づいたら自分の部屋へ辿り着いていた、そんな感じだ。日常とは違う出来事に困惑して、ただ、最後に言われた言葉がずっと心に残っていた。

そう、このままでは逃げられてしまう。結局うやむやにして、本当に起こったことが何だったのかさえわからなくなって、後悔と徒労感だけが手元に残る。

それでいいのか？ 自分がしたことの意味を知りたいと思った。それがどのような結果にせよ、終わりを目撃し納得したかった。自信が徐々に息を吹き返し、自分が正しかっ

たことを信じてみようと思った。このままでは終われない。

あのミツイという小児科の先生から再び電話がかかってくる前に、自分の心は決まった。

夕方、先生からの電話でその意志を伝えると、非常に喜んだ声で『一緒に立ち向かいましょう』と言われた。そして、何点か細かい事項を言われた。明日からは12時過ぎに来院し、その際はぜひ時間を有効に使えるようタクシーに乗って、領収書をもらってほしいこと、また、夕方は検査等があるため、午後3時くらいまでアヤカちゃんの話し相手となり、両親が健在であることを疑わせないこと、その後は、看護師が引き受けるので自由に帰って構わない、とのことだった。

大学の授業のことで少し気を遣われたが、3日間行かないことで困るような授業はなかった。それにタクシーに乗れば確かに、夕方の授業は受けることができそうだった。

翌日、言われた通りタクシーに乗って病院へ向かった。11時半過ぎに出たが、着いたのは12時前だった。服装はジーパンに黒いタートルネックのセーターという目立たないものを選んだ。

昨日と同じく小児科の外来に行き、しばらく待った。先生は、12時15分頃やってきて、「遅れて申し訳ない」と言った。

「いえ、僕が早く来すぎてしまったので」

「それじゃ、もう今からアヤカちゃんの病室へ行きましょう。手洗いの後、白衣など着用して頂きますので、服の上から着てください。風邪などひいてないですね？」

「はい、大丈夫だと思います。あの、そういえばアヤカちゃんの病気というのは、一体どんな.....」

「そうですね。一応、心臓に関する疾患ですが、プライバシーの点もあり詳しくは話せません。サイトウさんには不安や先入観を持ってもらいたくないです。ただ、小児専門病院でしか扱えないほど、特別な疾患ではありません。治療が成功すれば完治します。それを信じてアヤカちゃんと接してください」

「わかりました」

昨日に比べて、先生の口調に力強さが増している気がした。もしかしたら、この人も自信を取り戻しているのかもしれないと思った。いや、きっとそうだ。昨日の言葉が、僕だけでなく先生自身も励ましたのだ。同調する人間を増やせたことがきっと、心強いに違いなかった。

「それから今日、面会の後、少しお時間取れますか？」

先生が窓の外を見ながら聞いた。

「大丈夫ですけど、何か？」

「いや、大した話じゃないですが、とにかく今は面会が先ですので、また後でお話しします」

先生の後について、病棟に案内された。まずナースステーションへ行き、そこで担当の看護師さん数名と軽い挨拶をし、手洗いや白衣の着用をさせてもらった。そして、「本当は顔が見れたほうが子供は安心するのだが」と、マスクを渡された。

「やはり手術前ということもあり、しないわけにはいかないのです」

「わかりました」

アヤカちゃんの病室は、ナースステーションの傍にある個室だった。白いスライドドアを開くと、はじめに看護師さんの背中が見え、その後ろでベッドに上半身を起こしている小さい女の子が見えた。ピンクのバジャマを着た、普通の女の子だった。

「こんにちは」

先生がゆっくりとした親しみやすい口調で言った。

「こんにちは」

はっきりとした声だった。正直、病気とは思えなかった。確かに先入観を持っていなければ、治療なんてバンソウコウひとつで充分じゃないか、と早とちりしそうになる。初めての対面に緊張と不安を抱いていた心が、ふっと軽くなった。

「今日は、お見舞いの人に来てるよ。パパの本屋さんに働いてる人。サイトウさん」

「パパ！」

ひと際大きな声だった。見開いた眼で僕を見ている。

「そう、パパ達、風邪ひいて来れないよね。だからパパが、代わりにこのお兄ちゃんに頼んだの。アヤカちゃんのお話聞いて、パパ達に伝えてって。パパ達のお話も、アヤカちゃんに伝えてくれるよ」

先生が僕を紹介しようと手招きし、僕が自己紹介するより前に、アヤカちゃんが先生に尋ねた。

「お話ってあの話？」

「あ、そうだね、あの話もあるね。でも他にも、パパ達にお伝えしたいこと、アヤカちゃんあるんじゃないかな」

「あるよ。いっぱいあるよ。あのね、パパとママはいつ来れるの？」

「もうすぐだよ。手術には間に合わないかもしれないけど、それまでお兄ちゃんに来てくれるよ」

「来れないの？ じゃ、しゅじつ イヤ……」

「大丈夫だよ。きっと成功するから」

「イヤだ。しゅじつ しない。先生キライ」

「はっは、困ったな。それじゃ、パパもママも先生も困っちゃうな。みんなでお外で遊ぼうって約束、どうする？」

「イヤ」

「お兄ちゃんも遊びに行きたいって言ってたよ？」

「ホント？」

「うん。ね？」

先生が笑顔で僕に聞いた。女の子は口を開けたまま真剣な表情で僕を見上げている。

「あ、はい、うん」

「そうなの？」

曖昧な表情で僕を見ている。どう接していいか困っている顔だ。

「うん。行くよ、どこ遊びに行く？」

少し、女の子の表情が和らいだ。

「あのね、近所の公園と、あと病院のお庭と、あとあそこの遊び場」

「そうなんだ。じゃ、治ったら行こう」

「それじゃあ、アヤと、パパと、ママと、先生と、お兄ちゃんね」

「あたしは？」

傍についていた看護師さんが笑顔で言った。

「いいよ。行こう、みんなで行こう」

「じゃ、決まった。治ったらみんなで行こうね。約束だよ」

「約束だよ。指きりだよ」

そう言って、その小さな小指を差し出し、高々と掲げた。先生と看護師さん、そして最後に僕も加わると、まるで多すぎる「三本の矢」みたいに、大きな小指が絡まり切れずにもつれ合った。

「ゆーびきーりげーんまーん、うーそつーいたーら、はーりせんぼーんのーます！」

みんなの声が重なり、病室に響いたが一人だけ、アヤカちゃんの「のーばす！」という掛け声ははっきりと聞こえ、みんなが笑った。

「アヤカちゃん、『のーます！』だよ」

「違うよ、呑むのはね、コワイんだって。ママが言ってたよ。針ね、千本呑むのコワイから、『のーばす！』でいいんだよ」

「そうなんだ、じゃ、伸ばそう、みんなで、針を、びよーんて」

先生の言い方がおかしくて、看護師さんが笑った。

「でもそれじゃ、嘘ついても楽しそうだね」

先生が冗談ぽく聞くと、アヤカちゃんは必死になって答えた。

「嘘ついて楽しくないよ、心が悲しいの、嘘つくよ。だから、楽しくないよ」

「そうだね、いいこと言うね、アヤカちゃんは」

「うん。だからね、嘘つかないよ、アヤは」

「そうか」

「先生もね、嘘つかなければ、伸ばさなくていいんだよ、針ね。だから、嘘つかないで」

「うん、わかった。約束」

「約束」

「じゃ、もう一回伸ばしましょうか？」

僕が言い、小指を出した。

「じゃ、またアヤね」

そう言って、もう一度アヤカちゃんの小指の周りに集まり、みんなで指きりをした。

「ゆーびきーりげーんまーん、うーそつーいたーら、はーりせんぼーんのーばす！」

僕は面白くなって言った。

「でも、千本伸ばしたら大変だね。時間かかるね」

「だから違うよ、嘘つかないの。そしたら、針のばないよ」

「そっか。のばないか。じゃ、僕も嘘つかないよ」

「うん」

「約束だ」

僕はそう言って、小指をもう一度出した。

「あはは、また約束だってえ！」

アヤカちゃんは喜んで足をバタバタさせた。

「じゃ、次は私だ」

「その次はあたしね」

それを見ながら、なんとか馴染んでもらえそうだと安堵する自分がいた。

「楽しかったね。じゃ



「楽しかったね。じゃ、先生はちょっと他の子を診てくるから」

しばらく指きり遊びをした後、先生はそう言って部屋を出て行った。その後20分くらいしてから、看護師さんも用事があるので退室した。

それから二人で絵本を読んだりお絵描きをして過ごした。ともすると、保育士にでもなった気がして、ここにいる理由を忘れてしまいそうだった。自分に子どもと遊ぶ才能があるのも初めて知った。

アヤカちゃんは絵本を読むのが得意で、ひらがなとカタカナはもう大体読めるようだった。アヤカちゃんが絵本を読み、分からない字を僕が教えた。たくさんの絵本があり、知っている有名な絵本もあったし、よく知らない絵本もあったが、どれも新品に近い綺麗な本で、買えば結構な値段になりそうだった。きっと入院した時に両親が持ってきたのだろう。

「アヤね、いっぱい本読めるの。でもね、パパはもっとたくさん読めるよ。すごく難しい本もね」

「そうなんだ。それはすごいね」

「パパね、昔お話を書いていたの、それでね、本屋さんになったの。アヤにね、いろんなお話してくれるんだよ」

「そうなんだ、パパはお話も書けるんだ。アヤカちゃんにどんなお話をしてくれたの？」

「あ、そうだ！ パパにあの話、聞くんだった！」

「え？」

「あの話、まだ途中だったの。あのね、パパにしゅじつイヤって言ったら、しなきやダメって言われたの。じゃなんか楽しいお話してってアヤ言ったの。いつもみたいに悲しいのじゃなくて、元気が出るお話、しゅじつ怖くないように。そしたらパパがね、お話してくれたの。それで犬がね、大きくなるの」

「なに？」

「あのね、犬がいるの、それがね、ある日、どんどん大きくなるの、急に。それで、街を壊しちゃうの。すっごく大きくなって、家よりも、ビルよりも、病院よりも大きくなるの」

「つまり、パパがその話をアヤカちゃんにしてくれたんだ。アヤカちゃんが頼んだんだね。でも、なんだかおかしい話だね」

「うん」

「それでどうなるの？」

「わかんない。犬はね、病気なのかな？ 大きくなる病気？」

「そうだね、そうかもしれないね」

「じゃ、可哀想だね。どんどん大きくなったら、犬小屋に入れなくて、住めなくなっちゃうもん。だから、治るといいねってパパに言ったの。でもパパは、そう簡単に治るもんじゃないって言ったの」

「そうなんだ」

「それでね、先生にね、パパにお電話してって言ったの。そしたらね、でもね、パパお風邪だから電話できないって言われたの。それでパパのお話ね、アヤ知りたいのにね、わからないの」

そこで、アヤカちゃんの表情が一変した。まるで津波が一瞬で日常を舐め尽くし奪い去る、そんな圧倒的なたやすさで、それまでの笑顔はくしゃくしゃの泣き顔に変わった。

「パパとママ、アヤのこと嫌いになった？ アヤずっと病気だから」

「違うよ。絶対違う。パパもママも、アヤカちゃんのこと大好きだよ。本当に、ちょっとお風邪をひいてね、声も出せないの。お見舞いにいつも来てたでしょ？ それで、お仕事も多くて、ちょっと身体が疲れちゃったのかな。でも、すぐによくなるよ」

「本当に？」

口をへの字に曲げ、次の涙をこらえながら必死で訴えている。眼も頬もすでに真赤だ。

「もちろん。だからお兄ちゃんが、パパとママにアヤカちゃんの話伝えるよ。でっかい犬の話も、続きをパパに聞いておくよ。パパもママも、それにみんなも、アヤカちゃんのこと大好きだよ」

言ったそばから崩れ落ちる足元に目を背け、あざ笑う声を聴かないように必死でしゃべり続けた。手ごたえなどあるはずがない。この子はこれから先、ずっとこの思いを抱えて生きていくのだ。どんなに楽しく遊んでいても、その下にはこの悲しみの表情がいつでも潜んでいて、ささいなきっかけでこの子をどん底へたたき落とすのだろう。

「じゃ、約束して」

この子には、約束しかないのだと思った。確かな希望が何もない現実の前で、それが今の彼女を支える最後の命綱に違いなかった。その頼りなさを、震えながらそっと差し出された小指のか細さを、僕は忘れることができなかった。

その後はもう、僕も必死だった。



その後はもう、僕も必死だった。とにかく雰囲気明るくしようと、とりあえず妙な節をつけて全身で踊っていた。テレビで流行っている子供好きしそうなフレーズも参考に、なりふり構わず、まるで珍しい宇宙人が憑依でもしたかのように、一心不乱に舞い狂った。「部族の踊りシリーズ！」というフレーズがヤケにウケたので、即興でアフリカ編からユーラシア大陸編まで披露したところ、騒ぎを聞きつけた看護師さんがやって来て、軽く怒られた。それから、また三人で大人しく絵を描いたりして過ごした。部族の踊りをする部族の想像図を僕が描き、葉っぱ一枚つけた架空の部族の物語にアヤカちゃんは大ウケだった。

そこで先生がやって来て、今日のところは面会時間の終了だと告げた。アヤカちゃんは僕が立ち去ることに少しぐずって、代わりに看護師さんが慰めてくれた。僕は「また明日ね！」と強く言って、病室から出た。

すでに時計は15時近くになっていた。先生は僕に御礼を言った後、アヤカちゃんの様子について聞き、特に問題なさそうだと判断すると、「ところで」と話題を変えて言った。

「今日の面会は終了なのですが、実は、先ほど言っていた件で、できれば今から会って頂きたい人が二人います。そんなにお時間はとらせないと思うのですが」

「いいですけど、誰ですか？」

「一人は、タチバナさんの弁護士です。もう一人は、この件を担当している警察の方です」

「え？」

「驚かせてすみません。大した用件ではないのですが、弁護士は、一度挨拶したいと。警察の方は、簡単な聞き取りをしたいとのことです。タチバナさんの件に関して」

「はあ……」

「事前にお伝えしようかと思ったのですが、面会の前に言うとサイトウさんの精神に波が立つかもしれないと思いまして。病院の人間も同席しますので、緊張なさらずにただ話をする感覚でいてください」

確かに、警察と聞いたら少しは気になる部分もあったに違いなかった。

「わかりました」

それを聞いて先生は、会議室の一つに僕を案内すると、「申し訳ないが他の人間に任せられているので、別件で行かねばならない」と言って立ち去った。その後、5分くらいで一番

初めに受付をしたヨシザワという女性が、黒いスーツの男性を連れてやってきた。きっちりとした身なりが印象的で、「弁護士のヤナギモト」と名乗り、名刺を差し出してきた。そして受付の女性がそのまま部屋に残り、3人で座って話をした。

「サイトウさん。あなたが以前、タチバナと出会っていた話は伺いました。それが本当だとしても、こういった形で部外者が関わることに、私は賛成していません。ただ、ミツイ先生があくまでアヤちゃんの治療を第一に考えた結果と言われましたので、引き下がりました。それから、あなたの大学のゼミの講師は、ミツイ先生と知り合いだと伺いましたが」

「え？」

「ミツイ先生が大学へ電話して、講師にあなたの身元を確認したと伺いましたが」

「あ、そう、ですか。...いや、知りませんでした」

どう言っているのかわからなかった。確かに、自分が通う公立大学には医学部もあり、先生がもしそこを卒業しているなら、学部は違えど全くあり得ないという話ではなかった。

「その講師があなたを高く評価したのが決め手となって、ミツイ先生はあなたに協力を依頼したそうですが。とにかく、人の命がかかっています。しっかりお願いしますよ」

それだけ言って、弁護士は去って行った。

それから、女性が立って警察を呼びに行った。くたびれたスーツの刑事が来て、本当に簡単な聞き取りをされた。捜査はもう自殺の線で固まっているらしく、その裏付けとして証言を取りに来たとされた。僕はもう一度、起こったことを簡単に説明すると、それで充分とのことで、刑事は早々に引き揚げて行った。

「お疲れ様でした」

退室するとき、女性が部屋の電気を消しながら言った。

「あ、いえ。こちらこそ、御面倒おかけしました」

「あの、先程の話なんですけど」

「え？」

「弁護士の方が言った、大学の講師の」

「あ、はい」

「あの、あたしなんです、本当は」

「は？」

「あの、ヨシザワ.....」

ヨシザワ？

「え、まさかヨシザワって？」

「はい」

「あのヨシザワ先生の？もしかして、娘さん？」

「はい」

「ええ！」

彼女の頬がみるみる紅潮した。

「いや、すみません。隠すつもりはなくて。ただ、あなたが父と同じ大学の文学部だということで、父に確認してみたんです。そしたら、父のゼミの生徒だということで。それで、そ

の話をもツイ先生にしたところ、あなたのことを詳しく聞いてくれないかと頼まれました。父はサイトウさんを非常に真面目な方と申ししており、そのことをツイ先生にお伝えしました」

確かに、ゼミのヨシザワ先生はもう60歳近いのに、ツイ先生は随分若かった。知り合いと言われて何となく感じた違和感はそのせいだったのだ。

「それで、ツイ先生はきっと弁護士の方に、あたしのことを伏せてくれたんだと思います。万が一の時は、先生が一人で責任を負うつもりなんだと思います」

「そうですか」

あの先生らしい、ということなのだろう。

「父には、サイトウさんが人助けで数日休むと連絡してあります。単位のことなどは心配しないでください」

「あ、いや、それはそこまでしてもらおうと、逆に恐縮ですが……」

確かに、予定で行けば明日のゼミを一度休まねばならなかったが、しかしヨシザワ先生は元々そんなことを気にするタチではなかった。

「すいません。勝手な真似をして」

「いや、いいですよ。そうですか、ヨシザワ先生の。本当に世の中狭いですね。でも、先生にそんな真面目な学生と思ってもらえてよかったです」

「いえ。サイトウさんは絶対に真面目ですよ。だって、この前の話も、あの、タチバナさんの話を伺ったときも、本当に、うまく言えないですけど、私は感激しました。」

「いやそんな、それはだって本当によかったのかわからないですし」

「いえ、私にはできません。たぶん、そのままびっくりして立ち尽くすか、慌てて立ち去るか、叫び声さえ上げられないと思います。本当にすごいと思います」

彼女は眼を輝かせて、相当に興奮している面持ちだった。もちろん、そこまで言われてうれしくないわけがなかったが、残念ながら手放しで喜べる話題でもないと感じていた。結局、人の命が失われ、僕がしたことの意味は宙づりになったままだ。正しさを力説されても、それを鵜呑みにすることも、かといって真っ向から否定することもできない。しかも、何が正しい行為なのかここで議論したところで、何かが戻ってくるわけでもない。

ふと、もしも違う場所で彼女と出会っていたなら、もっと別な話ができのかもしれないと思った。それこそ、大学にフラッと現れた彼女と構内で出会っていたなら。それが何かとても胸の弾む想像であることを、認めないわけにはいかなかった。

不意に、後ろから心を覗かれたような気がして、ゆっくり振り返った。もちろん、誰もいない。ただの病院の通路だ。ふと、死者はただいなくなるのではないことに気づく。遺された人々がもはや語ることでできない思いや、新しい現実の可能性をそっくりあちら側へ持ち去ってしまうのだ。だが……

それが全てではない。我々が生き続けている現在の領域に、死者は決して踏み込むことができない。だから、いつまでも引きずられるわけにはいかない。

引きちぎってやれ。希望と絶望の狭間で、いつまでも死者と綱引きを続けている余裕はない。死者が絶望を望むなら、綱ごとくくてやる。その代わりに、我々は死者を捨て、別の未来を進もう。孤独を生きる覚悟が、我々を照らす道しるべとなるはずだ。アヤカ

ちゃんの将来に立ちはだかるであろう困難と、それを乗り越える姿を強く願った。

唐突に場違いな決意で前へ向き直ると、ヨシザワさんが自身の高揚感の落とし所をなくしたような、少し不思議そうな顔で僕を見ていた。

その後しばらく、ヨシザワさんと



その後しばらく、ヨシザワさんとアヤカちゃんについて話してから、先生に再び会い明日の予定等を確認し、そのままタクシーに乗り家へ帰った。途中、17時過ぎの見事な秋の夕暮れをぼんやり眺めながら、アヤカちゃんから聞いた犬の話について考えていた。先生は、「アヤカちゃんはその話をずっと気にしていた、本人にとってとても大事なことなんだと思う。でも、文学部の優秀な生徒であるサイトウさんなら、きっといい結末を考えてくれるでしょう」と、冗談めかして言っていた。なかなか責任重大な任務だったが、逆にやりがいを感じずにもいられなかった。僕が文学部へ入った理由はもちろん、小説家になりたいからだ。ならば、他人から引き継いだ物語にどれだけ納得できる結末をつけられるか、この勝負、受けて立つ覚悟だった。

さしあたっての課題は、犬が大きくなることの意味だった。いったいどんな意味があるのだろうか、いや、意味は求めるべきでないと思った。それよりも、大きくなった犬が一体何を感じているのか、元の大きさに戻りたいのか、それとも更に大きくなりたいのか。

そんなことを考えているうちに、やはり慣れない緊張のせいか、タクシーを降りる手前くらいから突如、暴力的な眠気に襲われ、部屋へ着くなりベッドに倒れ込んだ。まるで脳ごと持っていかれるような眠りだった。

眠りの中で、夢を見た。大きな夕焼けが街を照らしていた。真っ赤に染まる建物の群れを、とても高い位置から俯瞰していた。雲よりも、山よりも高かった。そこで、自分が大きくなっていることに気づいた。犬だと気づいて下を見ると、遙か地上へ向かって毛の生えた前足が伸びていた。「そういうことか」と思ったが、どういうことなのか忘れてしまった。女の子の声が聞こえた。はじめは何かわからなかったが、自分の名前を呼んでいるのだと気づいた。「ヒーロー、かえろー」と叫んでいた。どこへ帰るのか、大きくなった自分に帰る場所があるのか、疑問に思った。このまま、行き場もなくさまよのだろうか。ヘリコプターが近付いてきて、取材か、攻撃されるのか、心配になった。更にヘリコプターの音が大きくなり、それがヘリコプターではない、携帯のバイブ音だと

気づいた。

携帯はジーンズのポケットに入ったままだった。しばらく、夢と現実の間をさまよってぼんやり聞いていたが、音が止まった瞬間、まずいと感じ一気に目が覚めた。

部屋が暗かった。今、着信があるのは病院からの可能性が一番高かった。携帯を開けると、21時と表示されていた。着信と留守電が2件あり、10分前にミツイ先生、そして今のが病院からだった。緊急に感じて、留守電を聞くより先に着信があった順に電話をかけると、先生はつながらず留守電、病院は警備室の男性が出た。

着信があった旨と事情を説明すると、しばらく待たされた後、聞き覚えのあるヨシザワさんの声が受話器から響いた。慌てた口調で、アヤカちゃんが緊急手術すると告げられた。理由は分からないが、やはり今日の新しい出来事に若干興奮したせいかな、病状が不安定になったようだった。ただ、「手術が早まることは想定内であり、決して驚くことではない」と先生が言っていたそうで、できれば僕を呼んで、手術前に少しアヤカちゃんと話をしてほしい、と伝えられたようだった。

そのままの格好で家を出た。急いでタクシーに乗り、病院へ向かう。道路は若干混んでおり、21時半前に病院へ着いた。言われた通り夜間専用通路の前で、ヨシザワさんが待っていてくれた。

「急にお呼びしてすみません。私の後について来てください」

「わかりました」

ヨシザワさんに従って、真っ暗な受付ロビーを抜け手術室へ急いだ。ヨシザワさんも呼び出されたということなのだろうか？ 無人の受付カウンターを見ながら、ふと疑問に思った。エレベーターのボタンを押すと、すぐにドアが開き、二人で乗り込んだ。ヨシザワさんが2階のボタンを押しながら言った。

「本当は、こんなことないんですけど」

「え？」

「病院職員が特定の患者さんに付き添ったり、勤務時間外にこんなことするのは。でも、お願いしたんです、ミツイ先生に。アヤカちゃんのご両親を亡くしてますし、力になれることがあれば、いつでも連絡してくれって。それで、サイトウさんと連絡つかないので、私に連絡が来たんです」

「そうですか。すみませんでした」

「いえ、逆にうれしいです。力になれて」

そこまで言うとドアが開き、正面に手術室へ通じるドアが見えた。ドアの脇の壁にへこみがあり、そこへ足を入れるとドアが自動で開いた。中へ入りもう一枚のドアを越えるといくつかの部屋があり、その一つへ案内された。部屋にはドアがなく、外からアヤカちゃんが顔を赤くして、ベッドに横たわっているのが見えた。呼吸が荒かった。

ヨシザワさんが隣にいた看護師さんに呼びかけ、看護師さんが「お兄ちゃんが来たよ」と言って、アヤカちゃんについている人工呼吸器のマスクをはずした。

「ママとパパは？」

一瞬、全員が言葉を失いかけたが、僕が間を空けずに言った。

「パパもママも大丈夫だよ。頑張ってお風邪治すから、アヤカちゃんも頑張って手術しようねって言ってたよ」

「うん」

少し、朦朧としているようだった。看護師さんが、葉で少し意識がぼんやりしているせいだと僕に言った。

「お兄ちゃん。パパに聞いたの？」

「聞いたよ。あのお話の続きでしょ？」

「うん。犬は死んじゃうんでしょ？」

「死なないよ。犬はね、病気が治るんだ」

「治るの？」

アヤカちゃんのはっきりと、大きな声で聞き返した。

「そう、大きくなってとても不安だったけど、女の子が呼ぶんだ。飼い主の女の子が、ちょうどアヤカちゃんくらいだね、『帰っておいで、ヒロ』って」

「ヒロっていうの？ 犬の名前？」

「そうだよ。ヒロは、急に勝手に自分の体が大きくなって、すごく怖かったけど、女の子の声を聞いて、元気が出て、手術を受けようと思うんだ。ちょうど、すごく手術のうまいお医者さんがいてね。髪真っ白な優しいお医者さんが、大きくなった犬を何匹も治しているすごい先生なんだ」

「ミツイ先生みたいだね」

「そうだよ。だから、手術は成功して、すぐに病気が治って、ヒロは元の大きさになるんだ。あっという間にね」

「よかった。アヤね、戻らないと思った。もう、無理だと思った」

「そんなことないよ。もちろん大変な手術だけど、決して無理じゃない。手術すれば必ず治る病気なんだ。だけどね、それからが大変なんだよ。いいかい。病気が治っても、それで終わりじゃない。大切なのはそこからなんだ」

「なんで？」

「うん。だって、生きていかになくちゃいけないからね。病気が治ってからのほうが、生きるのとはとっても長いし、いろんな苦勞をしなくちゃならない」

「どんな？」

「たとえば、また病気になっちゃうんじゃないか、という心配。周りの人も、『いつかまた大きくなって、みんなを困らせるんじゃないか』ってヒロのことをイヤな目で見たり、中にはいじめたりする人もいる。それに、ヒロが大きくなった時、自分の住む家を踏んで壊してしまったんだ。悲しいけど、その家の中に、飼い主の女の子のパパとママもいたんだ。パパとママは家の下敷きになって、助からなかった。だから、ヒロは女の子と二人きりになってしまった」

しばらくの沈黙があった。夢中で話し続けたが、アヤカちゃんがついて来れているか心配になった。

「.....可哀そう、ヒロ、可哀想だね」

「うん、アヤカちゃんとはとても優しいね。でも、ヒロは強いんだ。絶対負けないんだ。女の子も、決してヒロを責めたりしない。だって、わざとじゃないから。悲しいのは、ヒロも一緒だから。大好きなパパとママがいなくなっても、ヒロと女の子は、二人で一緒に生きようって誓うんだ」

「すごいね、ヒロ、えらいね」

「うん。一人ぼっちじゃないからね。ヒロと女の子は一緒に頑張る友達だから、強くなれるんだ。それにその子だけじゃなくて、ヒロはみんなの心の中にいる犬なんだよ。もちろん、アヤカちゃんの心の中にもいるんだ。アヤカちゃんの心の中において、一緒に生きていく友達なんだ」

「あのね、アヤね、本当はね、助からないって思ったの。ヒロね、死んじゃうと思ったの。だってね、パパのお話ね、いつも悲しいお話なの。お終いが、悲しいの。だからね、ダメだと思ったの。でもね、今度は悲しくなかったよ。ヒロの話、とってもね、少し悲しかったけど、でも嬉しかった。頑張ったね、ヒロ」

「うん。ヒロと女の子はね、負けないで、頑張ってるんだ。どんなことを言われても、二人でいれば大丈夫って」

「よかった」

そこまで言うと、看護師さんが手で僕を制した。そのまま部屋の外へ案内され、「時間がかかると思うので、今日は帰っても構わないし、待合室にいてもらってもいい」と言われた。

待合室は目の前にあり、廊下とはガラスの仕切りで区切られていたが、ドアなどはなかった。他に人はおらず、ヨシザワさんと二人で、とりあえず座った。時間は大丈夫か、お互いに尋ね合った気もするが、よく覚えていない。言葉もなく、放心したように、祈るように、二人とも黙っていた。長い時間だった。ふと、天井の蛍光灯を見つめながら、「映画で観たような光景だな」と考えていた。再びヨシザワさんに目をやると、静かな寝息をたてて眠ってしまったようだった。

今、手術室の中でアヤカちゃんが闘っている。ヒロは彼女を励ましているだろうか。まぶたを閉じると、ヒロとアヤカちゃんが、夕焼けの下をゆっくりと歩いていく残像が見えたような気がした。力強い足取りで、二人とも前を見据えているようだ。

その背中を見つめながら、僕も浅い眠りに落ちていった。

アヤカちゃんに会えたのは、その翌日が最後だった。



アヤカちゃんに会えたのは、その翌日が最後だった。

結局その日、起こされたのは明け方で、やって来た看護師さんが無事に手術は終わったと告げた。「成功したので安心して構わないが、一応経過を見ているので、今日は一旦

帰って、来れるなら明日の午後あたりに来てほしい」と言われた。正直、思っていたよりあっけないと感じたが、ホッとして笑顔が出たことに変わりはない。

ヨシザワさんは近いからと言って歩いて帰ろうとしたが、一応夜道だし、もし気にならないなら許可も出ているので、一緒にタクシーで帰るように勧めると、少し迷った後、「それじゃ甘えさせてもらう」と言って二人でタクシーに乗った。二人とも喜ばしいものの、半分寝ているような、何とも言えないぼんやりとした雰囲気だった。

5分くらい走った後、ヨシザワさんが「ここでいい」と言ってコンビニの前で降りた。何度も御礼を言った後、「本当によかった、それじゃまた明日」と言われてドアが閉まった。深夜にコンビニの平面的な明かりを受けながら彼女は、腰を少しかがめこちらを覗き込みながら、笑顔で手を振っていた。

その笑顔を見た瞬間なぜか、霧が晴れるように澄み切った意識で、あるはっきりとした事実を感じた。

これで、終わったのだ。

あれ以来背負っていたものが、足元にストンと滑り落ちて消えた。解放されはじめて、その重さに気がついた。ずっと、ひっかかっていた。自分のしたことがすべて間違いだと思う日もあったし、たとえ今でも、本当に正しかったのかはわからない。だが、やっと意味を持ったという手ごたえがあった。

これでよかったのだ。そう思った。

翌日、先生から昼過ぎなら少しだけ会えるかもしれないと連絡を受け、前日と同じ時間に病院へ行き、ヨシザワさんと一緒に面会した。

アヤカちゃんは僕を見て、「アヤ、頑張ったの」と言って笑った。僕たちは、「本当だね、よく頑張ったね」と褒めた。

「ありがとう」

話が出来たのはそこまでで、治療のために僕たちはまた外へ出なければならなかった。

その後も、アヤカちゃんの経過は順調だった。一月後には無事に退院も出来、ニュースにも取り上げられた。マスコミは悲劇や美談としてもっと祭り上げたかったのかもしれないが、タレントの不祥事や政治のスキャンダルやらが立て続いたせいで、それほど大きな話題にはならなかった。もしこの件で誰も亡くなっていなければ、暗い世相を明るくする話題として、もう少し重宝がられたのかもしれない。だが、どちらにしる世間が忘れ去る早さは変わらないだろう。

ヨシザワさんから聞いた弁護士の話では、アヤカちゃんのニュースが好意的に受け取られ、事態が好転し、預かり手となる親戚が見つかったとのことだった。その親戚は子供がおらず、海外と日本を往復して勤務していて、アヤカちゃんは来年にはヨーロッパへ行くことになるそうだった。回復がある程度進んでからということだが、来年からは小学校なので、海外で日本人学校へ通うことになるらしい。「空気もいいので、予後も安定するだろう」と先生は楽観的に考えているらしかった。それほどまでに経過は順調ということだろう。

ただ、手術の翌日以降、僕はアヤカちゃんに会うことはできなかった。その理由の一つは、僕という部外者がどうしてこの件に関係を持ち、どんな協力をしたのか、それに

マスコミが気づくと病院の責任問題に発展する不安があるからだった。また逆に、それこそ美談として持ち上げられ騒ぎが大きくなる可能性もあった。

もう一つ、最も大きい理由は、アヤカちゃんが僕と会うことで起こる心の揺れを、弁護士が嫌がったからだ。両親のことを思い出すかもしれないし、友達になると別れが辛くなるかもしれない。それに、新しく里親となる親戚の方に慣れさせたいという思惑もあったし、そもそも、部外者がこれ以上関わることを望んではいなかったということもある。

先生とは、術後も何度か電話でのやり取りがあり、この件で何度も御礼と謝罪をされた。その度に、会えないのは確かに寂しいが、それは大した問題ではないと伝えた。アヤカちゃんが元気で、すべてが良い方向へ進もうとしているのに、それ以上僕が望むものはなかった。

大学の方はまた何事もなく通い出し、ただ、ヨシザワ先生が今まで以上に、僕を気にかけてくれるようになった。僕とヨシザワさんがそれ以降も連絡を取り合っていることが、更に気になる理由だったのだろう。ヨシザワさんとは、主に日曜の休日に予定を合わせてどこかへ出かけたりする関係になった。僕もそろそろ就職を考える忙しい時期に入るので、特に彼女との関係を急ぐことはしなかった。

それから約一年後、バイトから帰った足で家のポストを覗くと、ドイツから手紙が届いていた。差出人の名前に見覚えはなかったが、それがアヤカちゃんを引き取った親戚であることはすぐにわかった。他に海外の知人はいないからだ。

手紙を読んでもみると



手紙を読んでもみると、書いたのは女性であるようだった。おそらく、奥さんの方なのだろう。序文には、御礼の挨拶がたくさん言葉で綴られていた。それから、連絡が遅れたお詫びと、この手紙を送ることになった経緯について書かれていた。非常に丁寧な筆致だった。

「本来であれば、手術が終わった後すぐ御礼に伺うべきだったが、私どもがサイトウ様のことを詳しく知ったのは、最近になって、アヤカの話聞いてからだった」と書かれていた。

「弁護士から、手術の際、ある方がアヤカの面倒を見てくれた、という話は以前より伺っていましたが、その方のお名前やどんな面倒を見てくれた方なのか、詳しくは存じませ

んでした。ただ、亡くなったタチバナの関係者であるらしい、ということだけは伝え聞いていました。

しかし、最近になりアヤカが盛んに『お兄ちゃんがヒロを助けてくれた』という話をするので、詳しく聞いてみたのです。『ヒロという犬がいて、お兄ちゃんが先生に手術をお願いして、治してくれた』とアヤカは言っています。他に、『それで、アヤも手術したら治ると思ったの。ヒロと友達になりたいから』など、ずっとその話をするので、ミツイ先生にメールさせて頂き、サイトウ様のことを知ることができました。本当に、感謝の言葉もありません。

この度、突然のお手紙を書かせて頂いたのは、なんとかその節の御礼を述べたい、というだけでなく、実は2点ほど、ご報告したいことがあったからに他なりません」

読み進めていくと、その1点目はアヤカちゃんの両親について、2点目が、最近のアヤカちゃんに関することだとわかった。

「既にサイトウ様もご存知かもしれませんが、アヤカの両親が亡くなった後、結局、弁護士が初めに言っていたような額の保険金はおりませんでした。詳しくは知りませんが、それでも、書店の跡地の売却や破産に関する手続きなどは弁護士が引き受けたようで、なんとか負債を帳消しにすることはできたようです。実は、亡くなったタチバナは親せき一同から敬遠されている状態だったこともあり、誰もその件に触れようとしませんでした。

私の夫がアヤカの父親の従兄にあたりますが、私たち夫婦の姓はタチバナではありません。タチバナは元々アヤカの母親の姓であり、アヤカの父親がその婿養子に入りました。アヤカの父親は小説家を目指していたこともあり、夢の延長かわかりませんが、タチバナ家の援助であの書店を開いたと聞いています。ちょうど新興住宅地の傍に立地していたこともあり、地域が活性化するとともに業績も伸び、数店舗を営むことができたようです。

しかし、挫折を経験しなかったせいか、芸術家気取りでプライドも高く、孤立していました。アヤカの母親もクセのある人で、子育てに苦しみ産後鬱の兆候もあったようです。相当な金額を払ってヘルパーを雇い、家事や育児を任せていたとも聞いています。神経質な夫婦で、いわゆる外面を整えることばかりに気を配っていた側面もあります。

私が以上のように故人の悪口を書くことで、お気に障ったかもしれません。しかし、私にはそうするだけの権利があると思っています。それは、事件の一年ほど前にかかってきた電話のせいです。

その電話で、タチバナは酒に酔っていたのか、私の夫に自慢話ばかりをしました。書店経営がいかにかうまくいっているか、またアヤカの病気について、『アヤカは助からないだろう、だが親として当然のことを、精一杯する義務がある』などと語っておりました。『もし書店が潰れても、アヤカに苦しみを残すバカな親にはなりたくない、むしろアヤカがあこの世で一人、悲しまないように、自分たち夫婦が先にあの世へ逝ってもいいくらいだ』と、前後が矛盾する話さえ、1時間近く続けました。

結局、アヤカを引き取る段になって先生とお会いして別の事実を知りました。先生が『アヤカの病気は確かに難病ではあるが、決して珍しいものではなく、手術して完治する』と言っても、タチバナは最後まで納得しなかったそうです。弁護士も、アヤカの病

気は不治の病だと信じ込まされていました。

また、その電話の最後で、タチバナは『自分ほど不幸な人間はいない。子供を持たない、サラリーマン家庭にはわからないだろう』というようなことを何度も口走り、さすがに夫も激昂して電話を切りました。

そのような事情もあり、アヤカを引き取ることに躊躇もありましたが、他に適当な世帯もおらず、私たち夫婦が引き取ることになりました。その節はサイトウ様にも多大なご迷惑をおかけしたと聞いています。重ねてお詫び申し上げます。

更に、最近のアヤカに関することで一点、ご報告したいことがございます。

先日、アヤカと私たち夫婦がご飯を食べている時、アヤカが突然、『パパとママに、お別れを言わなくちゃ』と言い出しました。

実はアヤカには、まだ両親が亡くなったことをはっきりと伝えていません。ただ、『用事があってアヤカとは別で暮らさなきゃいけないから、代わりに私たちが一緒に暮らすんだよ』とは伝えてあります。そのことでもっと泣いたり駄々をこねるものと思っていたのですが、それはたった数日で納まり、その代わりなのでしょう、アヤカは手術以降つい最近まで、表情のほとんどない子になってしまいました。それはもちろん心配でしたが、これだけの環境の変化があって仕方のないことと、先生とも相談してとりあえず様子を見続けていました。

ですから、突然そんなことを懸命にしゃべり出したので、どうしてか不思議でなりませんでした。最近やっと学校にも少しずつ行けるようになってきたので、誰かから聞いたのかもしれないと思い尋ねてみましたが、ただ『知ってるから』とだけ言うのです。『何を知ってるの?』と尋ねると、『パパとママのこと。もう会えないの。でも、大丈夫なの。ヒロが友達だから。ヒロはアヤの心の中において、住んでるの。ヒロが頑張るから、アヤも頑張るの。だから、パパとママにお別れを言うことにしたの』

意味がわかりませんでした。ただそれを聞いた時、今までこの子は子供なりに必死で考えていたんだと気づきました。

アヤカは絶対に納得できなかったはずですが、ですが、両親がいないその疑問に、自分の力で答えを出そうとしていたのです。私たち夫婦には今まで子供がおらず、こうやって子供が勝手に世界を構築して現実へ立ち向かって行くことには、本当に何度も驚かされています。私はそのとき、涙が止まりませんでした。

個人的なお話で恐縮ですが、私は一度、出産に失敗しています。もう子供は諦めたつもりでした。ですが、アヤカを見て、考え直す時が来たように感じています。もちろんどうなるかはわかりませんが、サイトウ様がアヤカに勇気をくれたのだと思います。そのことが、私にもわかります」

最後に、「数年後、日本へ戻った折には一度、御挨拶に伺いたい」と書かれていた。数年後、アヤカちゃんはどれくらい大きくなっているだろうと思った。そして自分も、どこで何をしているのだろう。

数年後のことはわからなかったが、その日ポストを覗いた理由は別にあって、あの事件の日に投稿した小説の結果がもしかして郵送で届いているのではないかと確認したのだ。だがもちろん連絡はなく、数日後、その賞を有名な俳優が獲得したと朝のワイドショーで知った。

まあ、何もかもがうまくいくわけではない。仕方がない話だろう。知らせを聞いたヨシザワさんからすぐに怒りのメールが届いたが、送る賞を間違えていたというメールを返し、また次回、別な形でトライすることにしようと思った。人生は短く、つまらない怒りや絶望に囚われている余裕はない。

靴を履いて家のドアを開けると、秋の日差しが柔らかく注ぎ込んできた。ごくありふれた日のごくありふれたやり取りが、僕の背中を後押しするのを感じる。ミュージックプレイヤーのイヤホンをつけて自転車にまたがると、『夕方のピアノ』が流れてきた。今日はゼミが始まるまで中原昌也の小説でも読んで、お茶目な殺伐さに半笑いでも浮かべようか。

もちろんこの後、僕の将来に例えば、特に考えもなしに就職した会社がとんでもない過重労働を強いてきたとか、付き合っていると思っていたヨシザワさんに実は遠距離の彼氏がいて七転八倒の紆余曲折が待っている、とかの出来事があったとしても、それはまた別の話だ。

たとえカゲロウのように世界が霞みゆく幻だとしても、とりあえず死ぬまで生きてみよう。そう思える瞬間が、幸福なのかもしれない。

あの日夢で見た二人の足取りがやむことのないよう強く祈りながら、自転車のペダルに力をこめた。



あとがき

あとがきと、若干の意図補（蛇）足

あなたにお読みいただいたことを、素直にうれしく思います（苦々しく思われていないことを祈りながら）。ちなみに、（これもニュアンスで申し訳ありませんが）『カゲロウの幻』は「未読」の状態で、『カゲロウのゆらめき』は「読後」に書きました。

長く創作を志してきましたが、自分の内側から出てくる物語が何もなく、書くこと自体もはや無理だと諦めていました。が、そんなうっ屈した手榴弾のピンが突然引き抜かれ爆発したのが、なぜかこの物語でした。どうやら「自分だったらこう書く」というやり方でしか書けない、残念な自分の発見です。

でもコメントで褒めてもらったりしたので、もう少し踏ん張ってみます。多謝。

奥付

奥付

カゲロウの幻

著者：弦楽器イルカ

発行所：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

ブクログのパプー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16804>

カゲロウの幻

著 弦楽器イルカ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
